下町の変容と文学者たち

槌田満文

地区にしぼって、その変容のあとを文学者たちの記述でたどってみることにしたい。

一

東京の下町が大きく変貌し、江戸のおもかげを失ったのは、大正十二年（一九二三）の震災と昭和二十年（一九四五）の戦災によることは疑う余地がない。しかし、下町の変容の原因をすべて不可抗力の災害だったとするのは、事実を見ない謬見といわなければならないであろう。

たしかに、関東大震災によって江戸以来の景観や風俗が壊滅的な打撃を受けたことは否定すべくもない。しかし何もかも一挙に失われたわけではなく、徐々に少しずつ、部分的に変化していったことは明らかである。ただしその変容の過程をつぶさにたどる作業は、地上に痕跡を残している遺物・遺跡などの史料が乏しいだけに、きわめて困難といってよい。おそらく、文献史料のなかでも景観や風俗を活写したその時々の文学作品が再現するイメージによって、可能な限りの追体験を試みるよりほかはないであろう。

下町のなかでも、特に江戸の名ごりの多かった本所・深川の江東

二

江東地区には、近代に入って大きく変貌したところと、それほどでなかったところがある。比較的変化の少なかったのは、伝統的な行事を伴う神社仏閣の周辺、河川に沿った木場や倉庫街などで、地域的には本所地区よりも深川地区に多かった。

また、時期的に見れば、明治二十年代以前と三十年代以後とでは明らかに異なる。陸上交通の便が悪かった二十年代以前は、近郊の行楽地も江戸のおもかげを色濃く残していた。しかし三十年代以後になると、主に本所地区が工業地の拡大につれて激しく変化したのである。

江戸時代から亀戸や向島の梅園を巡歴して梅見を楽しむ風流人は少なくなかったが、それは一日がかりの行楽であった。鶯亭金升は随筆集『明治のおもかげ』（昭和28年11月、山王書房）の「仏様の

梅見」で、向島から亀戸の臥龍梅へ行くと「此処では梅の花漬を入れた湯を出すので弁当を開く下戸もあり、瓢を空にする上戸もありこれで一日をうかうかと暮らすのだが、田園を歩いた面白さが今も目に残って居る」と書いている。

『鶯亭金升日記』（昭和36年10月、演劇出版社）の明治二十六年（一八九三）三月十九日の項に「夫より墨堤、木下川、亀井戸の梅を見て柳島の橋本にて、一酌を催うし、夕刻帰宅」とあるのは、そうした行楽の一記録であろう。

「橋本」とあるのは、横十間川と北十間川が交叉する本所区柳島元町の東北端、現在の墨田区業平五丁目にあった料理屋である。柳島妙見堂の北側に面し、柳島橋のたもとに位置していた。江戸時代から知られた会席茶屋で、安藤広重の江戸名所百景「柳しま」、小林清親の東京名所図「柳島日没」にも描かれている。

東京通人『東京四大通』（明治40年10月、也奈義書房）には「柳島妙見の祠の傍なる橋本も、通人に喜ばれる所である。亀戸天神の左り門を出でて直に青田が見える所にあるが此家、所は辺僻であり、家も綺麗では無いが、庖丁は生粋の江戸前とて名高い。座敷器具も江戸式そのままである。鯉こくはことに名高い」とあり、笹川臨風の『明治還魂紙』（昭和21年6月、亜細亜社）も「橋本は流石に奥の植半よりも食べものが旨かったが、それよりも帰りに橋本と書いた、ぶら提灯を提げて堤の上を小梅まで出る風情がよかった」と記した。

金升はまた、『明治のおもかげ』の「雪の屋根船」で、明治二十五年（一八九二）の雪見についても回想している。日本橋の船宿から置き炬燵を入れた屋根船に乗って隅田川をさかのぼり、柳島の橋本の桟橋に船を着けた。「二階へ上ると今の工場のつづいて居る土手で、一面の田も畑も見渡す限りの銀世界は宛然広重の絵である。鯉こくを命じてゆるゆると飲んで居る中、妻は女中を案内者にして天神様へお詣りに出かける。其の蛇の目が土手を行くのを二階から見て居ると柳島から亀戸にかけて我が世界の様な気がする。……」

文中の「今の工場」は明治二十八年（一八九五）に建ち始めたモスリン工場で、それ以前の雪見は江戸の昔と変わらない風景を楽しむことができたのである。

三

伊藤銀月は『詩的東京』（明治34年11月、曙光社）で「東京の進歩は陸上において其度甚だ急速に、水上において其度甚だ遅緩なり」という警句を吐いたが、水上・水辺の変化がゆるやかだったのに対して、陸上の江東地区が大きく変貌したのは、近代的工場の急増が原因であった。工場の増加は明治二十年代後半に始まったが、その傾向が顕著になったのは三十年代半ばで、四十年代以後は激増の度を加えたといってよい。

他区に比して地価が安く、また水運の便にめぐまれていたことは工場の設置を容易ならしめたが、どの時期においても本所区は深川区を上回っていた。これは本所区の歴史的・地理的条件が工場設置をたやすくしたためであろう。その点について、本所で育った斎藤緑雨が「おぼえ帳」（『太陽』明治30年4～12月）で「純粋の江戸つ子は今深川に多く本所に多し、深川のは魚河岸とおなじく土着なるがあれども、本所のは然らず、眼先の一寸に明るく足元の三寸に

暗き江戸つ子の、これも生存競争の理にせめられて、余儀なく河を度りて退転し来れるなり」（四）と述べているのが示唆的といえる。

東京市編『東京案内』上巻（明治40年4月、裳華房）に収められた明治三十八年（一九〇五）調査の「工場票」によれば、東京市内の工場総数は四四三にすぎないが、そのうち本所区は一三七、深川区は六六で、両区の合計は市内総数の四六パーセントを占めていた。それが大正十年（一九二一）になると、工場総数は六二八四に達し、本所区が一二七五、深川区が一一五五と激増しているのである。

『深川区史』上巻（大正15年6月、深川区史編纂会）に載っている大正十一年（一九二二）調査の「深川区内各種工場別累年増加表」によると、工場の種別では機械工業・化学工業・雑工業・染織工業・飲食物工業の順に多かった。また時期的には、明治三十八年（一九〇五）以降の増加傾向が著しい。それ以前では、明治二十六年（一八九三）と三十三年（一九〇〇）の前後において変化が見られた。これはそれぞれ、綿糸紡績業を躍進させた日清戦争、北清事変、機械・化学の重工業を勃興させた日露戦争による影響と見ることができる。

北清事変が起こる直前の明治三十三年（一九〇〇）四月二十九日、根岸庵に寝たきりの正岡子規は、本所茅場町で牛乳搾取業を営む伊藤左千夫の家を、門下の赤木格堂、香取秀真とともに人力車で訪ねたが、左千夫はあいにく外出していた。

「どうせうか、と暫く躊躇した。頭のつかへさうな低き冠木門の右には若い柳が少し芽をふきかけて居る。左には無花果がまだ裸で居る。其向ふには牛小屋があるらしい。遂に決断して亀戸天神へ行く事にきめた。秀眞格堂の二人は歩行いて往た。突きあたって左へ折れると平岡工場がある。こちらの草原にはげんげんが美しく咲いて居る。片隅の竹囲ひの中には水溜があって鵞が飼ふてある。……」随筆「車上の春光」（『ホトトギス』明治33年7月）のこの記述を見ても、当時はまだ工場が田園風景の中にあったといってよい。

それから三年後の明治三十六年（一九〇三）一月三日、亀戸天神へ初卯詣でにいった尾崎紅葉、巌谷小波、斎藤松洲の三人が、当時会津に隠棲中の後藤宙外にあてて、柳島の橋本から合作の葉書を送ったことは、宙外の『明治文壇回顧録』（昭和11年5月、岡倉書房）に紹介されている。松洲が描いた絵の余白に「エヘン開運のお守はこれから出ます　紅葉」「矢はり江戸はようごッす　小波」と記されていた。

「これだけの短文ではあるが、此の両氏の江戸趣味にひたつた、満足の微笑をもらしてゐる、趣が見えるやうに思ふ。柳島辺の風景を添へて想像して見ると、一層感じが深くなる。しかし、あの頃でも川の向側には、もう赤煉瓦のモスリン工場などが出来始めてゐたのだから、追々と江戸趣味も猛烈な破壊期に出あつてゐたのである。……」（七）

この「赤煉瓦のモスリン工場」は、明治二十八年（一八九五）十二月に吾嬬村請地に創設された東京モスリン紡績株式会社の吾嬬工場であろう。このあたりは永井荷風の長編「冷笑」（『東京朝日新聞』明治42年12月～43年2月）に「天神様を出ると両側ともに製造場のつづいた溝渠を伝はつて、柳島の妙見様で開運厄除のお護りを頂いた帰り道」（七）と工場の建設状況が描かれているが、当時はまだ周囲にかなりの自然が残されていた。そのことは、荷風の小説

「すみだ川」（『新小説』明治42年12月）の次の一節によってもうかがえる。

「小家の曲り角の汚れた板目には売薬と易占の広告に交つて至る処女工募集の貼紙が目についた。然し間もなくこの陰鬱な往来は迂曲りながらに少しく爪先上りになつて行くかと思ふと、片側に赤く塗つた妙見寺の塀と、それに対して心持よく洗ひざらした料理屋橋本の板塀のために突然面目を一変させた。貧しい本所の一区が此処に尽きて板橋のかかつた川向うに野草に蔽はれた土手を越して、亀井戸村の畠と木立とが美しい田園の春景色をひろげて見せた。……」（九）

四

「すみだ川」発表から四年後の大正二年（一九一三）九月十日、永井荷風は両国の回向院から竪川筋を散策した。かつて短編「牡丹の客」（『中央公論』明治42年7月）で描いた本所四つ目の牡丹園をのぞいたのち、深川猿江裏町まで足をのばしたことを「大窪だより」（『三田文学』大正2年9月～3年7月）で次のように記している。文中の「深川夜烏」は、中学時代からの親友井上唖々の別号で、深川東森下町の裏長屋に隠れ住んでいた唖々をしばしば訪れたことを、荷風は随筆「深川の散歩」（『中央公論』昭和10年3月）をはじめ、多くの作品の中で書いた。

「いつか四ツ目牡丹園の門前に出候間園内に入りて盆栽を見歩き古池の渚に佇みて水蓼の茎の紅きを眺め申候。思へば深川夜烏と連立ちてこの庭に散り行く牡丹眺めたるも早や五年ほどの昔と相成候。門を出て再び足にまかせて処も定めず行く中忽製造場に取囲まれて薬液の悪臭甚しき小道に出で候。人に問へば猿江裏町と申由。この辺に住む人は一人として生きたる顔色はなく昔は大名の下屋敷と覚しき処々の大木皆立枯れ致し池の水血の如くに変色致居候有様全く眼も当てられぬ光景に御座候。兎に角むせ返るやうな煤烟と眼にしむ悪臭とに何とやら気も悪しく相成候間急ぎ小名木川の方へ駈抜け扇橋の欄干に憑りかゝりて暫時休息致候。……」（九月十日）

当時の猿江裏町には、明治二十年代にできた人造肥料の四星商店工場、丸鉄工場、安全マッチの新燧社、綿布染物の石田工場、三十年代にできた綿織物の明治工場、ランプ笠の原山硝子工場、ゴム足袋の萩原ゴム製造所、井上鉄工場などが並んでいた。大正三年（一九一四）十月、隣町に当たる南葛飾郡大島町の東京スプリング製作所に就職した平沢計七が、社会劇「工場法」（『労働及産業』大正5年6月）の舞台として「所。東京深川。猿江裏町の裏長屋」と設定したあたりである。

「大窪だより」に記すところによれば、荷風は二週間後の大正二年九月二十四日、再び電車で深川へ出かけ、小名木川のほとりから堀割に沿って木場へ向かった。

「この辺は同じ深川の果ながら先日散歩致し候猿江の辺とは全く異り製造場一つも無之いづこを見候ても材木浮べし静かなる水、川より堀、堀より池へと連り、岸には樹木、堤には水草生じ、水門のほとりには蘆荻風にそよぎ水郷の秋いかにも身に迫る心地致され候。……」（九月二十四日）

これによっても、大正初年の江東地区には、工場化されたところと、昔のままのところが混在していたことがわかる。こうした見聞

は「日和下駄」（『三田文学』大正3年8月～4年6月）の荷風をして、次のような逆説的言辞を吐かせることにもなった。

「浅野セメント会社の工場と新大橋の向に残る古い火見櫓の如き、或は浅草蔵前の電灯会社と駒形堂の如き、国技館と回向院の如き、或は橋場の瓦斯タンクと真崎稲荷の老樹の如き、其等工業的近世の光景と江戸名所の悲しき遺蹟とは、いづれも個々別々に私の感想を錯乱させるばかりである。されば私は此の如く過去と現在、即ち廃頽と進歩との現象のあまりに甚しく混雑してゐる今日の大川筋よりも、深川小名木川より猿江裏の如くあたりは全く工場地に変形し江戸名所の名残も容易くは尋ねられぬ程になつた処を選ぶ。大川筋は千住より両国に至るまで今日に於てはまだまだ工業の侵略が緩漫に過ぎてゐる。本所小梅から押上辺に至る辺も同じ事、新しい工場町として此れを眺めやうとする時、今となつては却て柳島の妙見堂と料理屋の橋本とが目ざはりである。……」（第六　水）

五

服部誠一の『東京新繁昌記』（明治7年4月～9年4月、山城屋）に始まる東京の〝繁昌記文学〟のなかで、異色というべきは山口孤剣の『東都新繁昌記』（大正7年6月、京華堂）であった。松原岩五郎のルポルタージュ『最暗黒の東京』（明治26年11月、民友社）に感動して社会主義者を志したという孤剣の『東都新繁昌記』は、さすがに類書とちがって、失業者やスラムの状況、芸人の労働条件などの詳しい報告を忘れていない。

孤剣は「水郷の深川」の章で「東京市の水面より低いといはれる此の区の千田町を以てして、海抜四呎、それを牛込若松町、海抜百二十九呎に比するならば、大なる相違がある。されば其の地価のごときも、中島町、裏大工町は三十円内外、亀住町、佐賀町一丁目は五十円内外、黒江町、相川町は七十五円内外、富岡町、門前町、東森下町は八十円内外で、東京中で一番安いといはれてゐる。其処で此の安い地価に目星をつけ、殊に河川の利用に至便なるより、多くの工場はつくられた。浅野セメントを筆頭として、東京倉庫、東京紡績、日本製鋼、東洋木材、日本製粉、東京製材、東京製氷、朝日肥料、深川鉄工、東京堅鉄などは、深川の地価と、深川の水に負ふ処が多からうと思はれる」と、工場化の背景を明らかにしている。

また「江東の工業地たる深川に、日に月に工場が殖えてゆくやうに、所在の町は職工の巣となつてゐる。今日の深川では、結城木綿の二枚布子、西川縞の羽織を着て、盲縞の腹がけ、股引きに白足袋といふ粋な職人はだんだん少くなり、油じみて光つた職工服、手も顔も真つ黒になつてゐる連中が、現代的の深川男を代表するやうになつて来た」と、職人から職工への推移に新しい時代の動きを見据えてもいた。

「職工の本所」の章では、労働者の窮乏と生活水準の低さを指摘して、孤剣は次のように結論づけている。「本所は東京の工業地でも、未だ文明の風は吹き渡らぬ。外套よりも合羽である。長靴よりも脚絆である。猿股よりも褌である。カフエーよりも居酒屋である。コーヒーよりも茶碗盛りである。ウイスキーよりも正宗である。瓦斯と電気よりも洋灯、行灯である。彼等はビリケンよりも大黒様を信仰する。浪花節を最高の音楽として、活動写真を最上の美術とする彼等は、東京に生れて東京に育ち、まだ歌舞伎座すら覗い

て見たことのないといふ連中が沢山ある。――本所の趣味は亡国的である、廃墟的である、木賃宿的である。凄涼悲哀暗惨陰鬱、人をして堪へざらしめる。……」

工場化の進展とはうらはらにすすんだ職工の窮乏が、それを取りまく自然の荒廃と無関係ではあり得ない。向島に住んでいた幸田露伴は、エッセイ「望樹記」（『現代』大正9年10～12月）で「一体此の十余年以来、一は市外地の戸数の激増したためでもあるが、又一は工場の増設より生ずる煤烟の多量に成たためでもあるが、須崎寺島隅田亀井戸吾嬬押上請地等の地方は甚しく樹木の生存を迫害されるに至つてゐる。亀井戸の臥龍梅園、小村井の江東梅園、向島の百花園、是等の梅園は皆見る影も無くなつた」と書いた。

そして「梅は濁棄樹ではあり、特に煤烟には弱いものであるから致方も無いが、梅のみでは無い、其他の種々の樹木が皆衰残の状にあるを余儀なくされてゐる。江東に名のあつた大木の松なども大抵枯死して終つてゐる。吾妻橋の上に立つて二十余町を隔てながら北の方に望見することを得た番場の槻の樹なども、今は有りや無しや見えぬことになつた」と、風流な行楽地だつた近郊風景が一変してしまつた状況を嘆いている。

この文章と関連するのは細井和喜蔵『女工哀史』（大正14年7月、改造社）の一節で、その「紡績工の教育問題」は東京モスリン亀戸工場の工場歌（小林愛雄作詞）を取り上げ、当時の亀戸周辺の景観に言及した。

工場歌の第一番は

「花の名どころ　亀戸に
　香ふ梅より　なほ清き
　操を誇る　三千の
　心は一ツ　へだてなし」

つづく第二番は

「此処は吾妻の　森近き
　河のあたりの　大工場
　心のかぢを　定めつゝ
　真白き綿を　紡くところ」

となっている。この詞章について、細井は次のように批判した。

「東京モスリン亀戸工場は市電柳島の終点を降りて妙見橋を渡り、左に同社吾嬬工場を眺めて水草一つ目高一ぴき浮かばぬ泥河べりを行き、三つ目の橋畔に在る工場だ。そのあたり一帯は砂塵と煤煙で濛々として殆ど自然の跡形を見せぬ荒地である。『花の名所亀戸に』第一番の第一行からして少しも現実にふれぬ遠き過去をうたつてゐる。亀戸に花があつたのは東京でなくして江戸時代だ。第二番の『此処は吾嬬の森近き河のあたりの大工場』がまた頗るふるつてゐる。吾嬬に森があつたのは之また数百年の昔で今は一本の立木さへ発見することが出来ない。まして此の吾嬬の森のあつたと思しき地点には同社吾嬬工場が運転してゐるのである。……」

この批判が、歴史的記述の誇張された部分はともかく、当時の実状に関しては当たっていたことは明らかであろう。

六

もともと低地帯の江東地区は、急激な工場化による地盤沈下が甚しくなったために、関東大震災以前にも、高潮（海嘯）と出水が大

きな災害をもたらしていた。畑市次郎『東京災害史』（昭和27年5月、都政通信社）によれば、明治大正の風水災は明治十一年（一八七八）から大正六年（一九一七）まで、十回にも及んでいる。工場化による地盤沈下が一因という点からすれば、高潮や出水による被害は、天災だけでなく人災の要素も加わっているといわなければならない。

大正六年九月の高潮については、泉鏡花が小説「黒髪」（『中外新論』大正7年1月）で扱った。その一節に「大正六年九月三十日、満月の夜より、翌朔日の未明を襲つた真夜中頃の東京の颱風は、……大江戸にも嘗てなかつた、或は有史以来と称ふる未曽有の天変であつた。全都到る処、就中、深川一帯、月島砂村の海嘯の大惨事は、尚ほ人の耳、われらの記憶に新なる処である」（五）とある。

高潮にもまして、江東地区に大きな被害をもたらしたのは出水であった。荒川放水路が大正十三年（一九二四）に完成するまで、向島から本所、深川にかけては毎年のように秋出水に見舞われている。放水路の完成後は被害が全く解消したところを見ると、秋出水もまた〝人災〟の一面があったことは否定できないであろう。

本所茅場町に住む牛乳搾取業の伊藤左千夫は、明治三十三年（一九〇〇）八月の水害に際して、連作「こほろぎ」をつくった。「八月二十八日の嵐は、竪川の満潮を吹きあげて、茅場のあたり湖を湛へ、波は畳の上にのぼりぬ。人も牛もにがしやりて、水の中に独夜を守る庵の寂しさに、こほろぎの音を聞きてよめる歌」という詞書をつけて「牀のうへ水こえたれば夜もすがら屋根の裏べにこほろぎの鳴く」「只ひとり水づく荒屋に居残りて鳴くこほろぎに耳かたむけぬ」「まれまれにそともに人の水わたる水音きこえて夜はくだちゆく」「水づく里人の音もせずさ夜ふけて唯こほろぎの鳴きさぶるかも」など十首をよんでいる。

明治四十年（一九〇七）八月の水害では、左千夫は連作「水籠十首」と写生文「水籠」を書いた。「水籠」（『ホトトギス』明治40年11月）には、今にも水の中に落ちそうな三歳の娘木綿子の動きにはらはらさせられながら「毒々しい濁り水の為に、人事の総てを閉塞され、何一つすることも出来ず」空しく日を送る籠居のさまが描かれている。

「高架鉄道の堤とそちこちの人家ばかりとが水の中に取残され、其隙間といふ隙間には蟻の穴ほどな余地もなくどつしりと濁水が押詰まつてゐる。道路とは云へ心当てにさう思ふばかり、立てば臍を没する水の深さに、日も暮れかかつては、人の子一人通るものもない。活動ののろい郵便小舟が猶ゆらゆら漕ぎつつ突当りのところを右へまがつた。薄黒い雲に支へられて光に力のない太陽が、此の水につかつて動きのとれない一群の人家を空しく遠目に視て居られる。……」

つづく明治四十三年（一九一〇）八月の出水にも、左千夫は「水害の疲れを病みて夢もただ其の禍の夜の騒ぎ離れず」「水害ののがれを未だかへり得ず仮住の家に秋寒くなりぬ」「針の目のすきまもおかず押し浸す水を恐しく身にしみにけり」「闇ながら夜はふけにつつ水の上にたすけ呼ぶこゑ牛叫ぶ声」などの連作「水害の疲れ」をつくっている。この時の水害は天明六年（一七八六）以来といわれた大きさであった。

永井荷風は小説「すみだ川」の続編について語ったエッセイ「つくりばなし」（『文明』大正6年11月）で、この時の被害について

次のように書いている。

「明治四十三年の大水と翌年の大火事とは、長吉とお糸が幼馴染の故里は申すに及ばず、伯父さんの松風庵蘿月が住んで居ります曳舟通の辺まで、小説すみだ川に出て来る場面をばさんざんに荒してしまひました。私はこの二度の災禍によつて江戸の名残といふ名残は思切りよく一掃され尽してしまつたやうな気が致します。ところどころの寺院の門、寮の柴折戸、路傍の石碑、社寺境内の古木なぞ幾分たりと昔を思出すやうなものは、あの水と火事とで奇麗さつぱりとなくなつてしまひまして、其の後は市区改正で往来が広くなり、トタン葺の家が建ち、電車が通ふやうになりました。向島を愛して長らく爰に住んでゐた隠居たちも、あの災難を機会として、山の手の方へ御引越になつた向も尠からぬやうに存じます。……」(一)

向島周辺に残っていた江戸の名ごりは、水害や大火ばかりでなく、明治二十二年(一八八九)五月の東京市区改正条例公布に始まる市区改正という人為的改変も加わって、関東大震災をまたずに滅びつつあったのである。

七

徐々に失われていった江戸の名ごりは、関東大震災によって決定的なダメージを受けた。大正十二年(一九二三)九月一日午前十一時五十八分に起きたマグニチュード七・九の激震は、全壊焼失家屋四十六万五千戸、死者九万一千人に及ぶ大災害をもたらしたが、特に江東地区の被害はひどく、焼失戸数九万七千戸、罹災者数四十七万三千人に達している。

福士幸次郎が再度深川に移り住んで、随筆「深川ずまひ」(『東京朝日新聞』大正12年1月27〜31日)を書いたのは、震災の年の始めであった。田端に住んでいた福士は前年の十二月、東京肥料日報社を経営していた兄の民蔵が佐賀町二丁目に新築したのを機に、大正二年(一九一三)から八年(一九一九)までいた松村町に再び居を移したのである。

「おなじ深川でも兄が殆ど土着化したそれは、本所に近接して近代の工業地化した深川や、電車が出来て沿線がいささか近代の都市化した深川やとは違つて、今でもつひ大河ひとつ隔てた鼻のさきの京橋や日本橋区やを『江戸向き』とか、『川向ふ』とかいつてゐるところの、旧江戸の残つてゐる深川である。わたしもここで詩壇に名乗りをあげ、処女詩集を出し、月刊雑誌を発行した。時には兄の身代りになつて、諸問屋の寄り合ひ所に縞の羽織を着て書記さんを勤めた。渋谷、小石川、代々木と自活生活の旗上げをしては、借金をこさへてその度に深川の兄の家へ尾羽打ち枯らして逃げかへつた。かうなつてくると、不純な地方人たるわたしにもこの大江戸の名残りが、昔風の板倉がぎつしり並んだ河岸や、材木をあたり狭しと立て並べた町並や、うす汚ない卵塔場や、くされた太鼓橋や、素枯れた川べりの立ち木などに残つてる風変りな土地を、第二の故郷ぐらゐに思つてくるのも無理がないではないか。……」(一)

津軽生まれの福士が愛着を持った深川に残る「旧江戸」は、明治三十七年(一九〇四)の市電開通と総武線亀戸駅の開設による都市化の影響も、四十年代以降激増の度を加えた工場化の影響も、殆ど受けないでいた。しかし関東大震災はそのすべてを消滅させてしまったのである。

大正九年（一九二〇）六月から『報知新聞』に連載されていた矢田挿雲の「江戸から東京へ」は、震災のために中断を余儀なくされた。挿雲は焼け跡を歩き回って書いた「灰燼に帰して了つた江戸名所」（『中央公論』大正12年11月）で「本所には、それでもおしるしほど焼け残つた人家があつたけれど、深川に至つては、人家のあるかぎり丹念に焼きつくした。月島の南端と、越中島から洲崎外面の埋立地だけが焼け残つた。それは一面の砂原で、何も焼くものがなかつたからである」と記している。焼失面積の上では、本所区が九五パーセント、深川区が八五パーセントに達していた。

下町に残る江戸は灰燼に帰したが、山の手のそれは大部分が被害をまぬかれた。しかし多くの人々が抱いていた江戸のイメージは、下町によって代表されている。それは震災以前にも、工場化などのいわば〝人災〟によって、すでに消滅寸前にあった。江戸の名ごりが十分に保存されていたにもかかわらず震災がそれを瞬時に壊滅させたというわけではなかったのである。

震災の翌年に刊行された水島爾保布の『新東京繁昌記』（大正13年6月、日本評論社）が「江戸趣味乃至江戸情調といはれてゐたもろもろのものにしたところで、実は今日迄その余喘を保つて来たのが寧ろ不思議なくらゐで、地震や火事があるなしに拘らず早晩自滅して了ふのが必然の数だつたのかも知れない」と述べているのは、その点を指摘した発言であろう。

震災直後のめざましい復興ぶりを見ても、史蹟保存より生活再建が優先したことは言うまでもない。区画整理中の東京を記録した「大東京繁昌記」（『東京日日新聞』昭和2年3～10月）の「本所両国」を書くために〝ふるさと〟を訪れた自殺直前の芥川龍之介は「如何に万法は流転するとはいへ、かういふ変化の絶え間ない都会は世界中にも珍らしいであらう」と嘆いている。

吾妻橋から円タクで柳島へ行った芥川は「名高い柳島の『橋本』も今は食堂に変つてゐる。尤もこの家は焼けずにすんだらしい。現に古風な家の一部や荒れ果てた庭なども残つてゐる。けれども磨り硝子へ緑いろに『食堂』と書いた軒燈は少くとも僕にははかなかつた。……」と記した。芥川は叔母との対話の形をとった一節で「僕は実際無常を感じてね。……それでも一度行つてごらんなさい。まだずんずん変らうとしているから」と述べているが、焼けなかった橋本の様変わりを見ればその嘆息も無理はなかったといわなければならない。

人為的改変が震災前も震災後も変わりなく続けられていた点では、下町も例外ではなかった。そのことはこれまで変容の過程を文学者たちの記述でたどってみたところによっても明らかといってよい。

東京の改変が殆ど人為的になされてきたとする認識は、陣内秀信『東京の空間人類学』（昭和60年4月、筑摩書房）が指摘するような、人為的に変えられなかった地形・道路などの部分に基本的都市構造における「江戸からの連続性」を見る視点につながるといえるであろう。